

## まちあるきの 考古学



今井町に足を踏み入れた時の、誰もが感じるある種の迫力。  
全国の古い町並みを歩いてきた私も、この迫力に圧倒されました。

細い街路に沿って、ツシ二階平入りの商家がびっしりと軒を連ねる。  
この景色は、観光用の「みせもの」ではなく、住民の日常生活空間です。  
重厚な迫力は、古い町並みが日常的な生活環境の中にあるからこそ、生まれるのかも知れません。

昭和30年、東京大学の調査により、今井町の歴史的町並みが「発見」され、  
伝統的建造物群保存地区の制度が誕生するきっかけになったといえます。

江戸初期以降の商家が750棟も「群」として残り、町の構造を一切変えること  
なく、路地の風情までも残して、今井町は存続してきました。  
大火に見舞われることもなく、時代の波に合わせ建替えられることもなく。  
まさに「奇跡」といえます。

今井町の先人たちは、環濠と土塁によって周囲から自立し、町掟を定めて自ら  
を厳しく律する検断制度を確立して、町を主体的に経営したようです。  
その精神が今に伝えられ、奇跡を生み出したのかも知れません。



## 今井町の町並み

細い街路に沿ってツシ二階平入りの商家が軒を連ねる統一感。  
これが今井町の町並みの特徴です。

街路に沿った壁面の位置と間口幅、軒先の高さは見事に揃い、本瓦葺きの屋根、木格子と白漆喰の外壁。これらが本物の重厚感をもって、訪れた人に迫ってきます。



町の要所には、豪壮な建物が姿を見せています。

今西家、上田家といった、江戸時代に町制を担った  
惣年寄の家屋や、豊田家、河合家といった豪商の家  
屋がそれです。

その構えは、まるで城郭のようです。



## 全国に先駆けて 町並み保全が始まった町

私達が目にする今井町の町並みは、昭和中期以降に「再生」されたものです。

昭和30年の東大調査により、今西家住宅が国の重要文化財に指定され、補修工事が行われたことをきっかけに、街中に眠っていた江戸時代の町家が、次々と文化財指定を受け再生されていきました。

家屋の重要文化財指定は、全国でも戦前に2件あるのみでした。今西家の指定が引き金となり、広がっていったようです。

再生が始まる前の今井町には、右の写真のような家屋が、沢山あったと思います。

ツシ二階に円形の虫小窓といった、町家の基本構造は江戸時代のままですが、長年住み続ける中で、シャッターとスチールサッシがつけられ、外壁はモルタル仕上げに改修されていきました。

右下の写真は、再生前後の典型例です。トタン葺き屋根に看板と庇、外壁はモルタル塗りで腰にタイルが貼られています。

これらの近代的素材を取り払い、江戸時代の仕様に戻してきたのが、いま私たちの見ている町並みです。

このような、古い町並みの再生は、高度成長期の終焉後、全国の歴史的な町で行われています。今井町は、その先駆けであるとともに、町並み保全の法整備を促した町でもあります。



▲修理前 (before)



▲修理後 (after)

# 戦国時代を駆け抜けた寺内町 それを先導した武家 今井家と今西家

室町後期、この付近に一向宗(浄土真宗)の道場ができ、天文年間(1532~55)に寺内町が誕生したと考えられています。当時、一向宗は石山本願寺を中心に、畿内、北陸、美濃、尾張、紀伊などの地域一円に広まっています、各地に寺内町が成立しますが、今井町もそのひとつでした。

元亀元年(1570)、信長との石山戦争に呼応して、今井町も周囲に堀と土塁を築いて武装都市化します。戦後も、「万事大坂同前」とされ、検断権(自治権)が認められます。

江戸時代には天領となりますが、同時に大幅な自治特権が許されます。今西家などの惣年寄三家が、司法・警察権の一部を握り、「町掟」を定めて自治都市今井町は運営されました。

今井町の歴史を語るのに欠かせないのが今井家と今西家です。寺内町成立から激動の戦国時代を駆け抜けた、寺内町今井を先導する武家でした。

今井町が天領に編入されたとき、今井家と今西家は武士の資格をはく奪され、今井家は称念寺の住職に帰し、今西家は商家の惣年寄筆頭となります。室町後期から続いた寺内町今井が、幕府の支配体制に組み込まれたのでした。

石山戦争時、寺内町が堀と土塁を築いて武装した時の町域を下図に示しました。今西家は西を守り、今井家の称念寺は南を守っていたようです。

付近のまちあるき [奈良町](#) [大和郡山](#)



飛鳥川の橋  
今井町への入口

今西家

← 復元された環濠

称念寺 →